

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18700577

研究課題名（和文）

世界の家政学領域における「人材育成」・「社会への発信」方法に関する研究

研究課題名（英文） How to “Develop Human Resources” and “Communicate with Society” in the International Field of Home Economics

研究代表者

山口 厚子 (YAMAGUCHI ATSUKO)

名古屋女子大学・家政学部・講師

研究者番号：10351008

研究成果の概要：世界の家政学の動向に対応した「人材育成」を担い、かつ、家政学の本質を「社会へ発信」する方法として、ICTと家政学を活用した国際交流プログラムやそれを支援するweb上のプラットフォームの開発と実践を行い、その可能性と課題を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	330,000	3,730,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般・家政・家庭科教育

キーワード：家政学、家庭科教育、国際交流、ICT、人材育成

1. 研究開始当初の背景

家政学とは本来、個人や家族、地域社会の生活の質を高めることに焦点をあてた領域である。一般にはあまり知られていないが、家政学は世界的に存在しており、それぞれの国においてその国の文化や歴史の影響を受けながら発展してきた。そして、家政学は、学校や大学、時には農村やビジネスの場において研究・教育・実践を通して人々に基本的なライフスキルを獲得するよう促し、個人や家族、地域社会がよりよい状況になるよう働く専門家を育成してきたといえるだろう。

しかしながら、実際には、大学における家政学関連プログラムの変形、縮小、学校における家政学教育のクラスが減らされているという現状、もしくは家政学教育が十分に価

値あるものとして社会的に認識されていないという現状が未だに世界的に存在するようである。また、国際家政学会において最も多い学会員数を誇る日本において、家政学会員の多くが家政学は何か説明できず、自分は家政学者であると思っていないという報告もなされている（例えば、Vincenti, 2006; Yamaguchi et al., 2004）。

こうした現状は、地域にはよるものの、世界全般的に、家政学の本質を理解して将来的に家政学領域の発展を担う人材を育成する場所に、決してポジティブではない変化が起こっていること、さらに、家政学の本質が未だ社会へ十分に伝わっていない現状があることを示しているといえるだろう。

そこで本研究では、こうした家政学に起こ

っている現状に対応した「人材育成」を担い、かつ、家政学の本質を「社会へ発信」することのできる方法（場所や機会の提供）を模索したいと思った。

2. 研究の目的

研究は以下の目的にしたがって進められた。

(1) 世界の家政学領域において特色ある「人材育成」や「社会への発信」方法について情報収集し、検討する。

(2) 国際的な家政学の動向を知り、現在、世界の家政学領域において、どのような「人材育成」や「社会への発信」が求められているのかを検討する。

(3) それらの知見をもとに、新たな時代のニーズに対応し、世界規模で家政学の発展を担う「人材育成」方法で、かつ家政学の本質を「社会へ発信」する方法を開発・実践し、その可能性や課題を探る。

3. 研究の方法

各目的を明らかにするためにとった方法は次のとおりである。

(1) フィンランド、シンガポール、マレーシア、スイスにおける学会へ参加、小中学校や農家の教育施設を見学する。さらに、米国において研究大学として旧家政学部を発展させているコーネル大学（アーカイブ図書館等も含む）を視察する。

(2) 国際会議への参加、IFHE（国際家政学会）のYPN（若手研究者のネットワーク）への入会、YPNが主催するワークショップへの参加を通して情報収集をする。

(3) 家政学とICTを活用した国際交流プログラムとそれを支援するweb上のプラットフォームの開発と実践を行う。本研究では、国際交流対象国としてシンガポールと日本をとりあげる。

4. 研究成果

上記の目的に沿った研究内容と成果は次のとおりである。

(1) 家政学の関わる「人材育成」や「社会への発信」が、学校・学会・大学・地域社会レベルにおいて多様な形で行われていることを理解した。

(2) 時代の変化は今、確実に家政学に追い風をもたらしている。2008年に開催された国際家政学会100周年記念大会は、世界規模で家政学の価値を確認し、家政学の大きな可能性を示した。例えば、IFHEのThink Tank Committeeは家政学の世界的な連携と発展をめざし、どの国でも共通理解が可能な家政学の本質についての文書声明、「Position Statement」を発表した（IFHE, 2008）。またIFHEの100年の歴史を伝える記念の書物やDVD、

家政学が国連の「持続可能な開発のための教育（ESD）」へ貢献することを意図して作成されたe-book（Programme Committee Consumer Issues and Family Resource Management）、e-journalが発行された。さらに、近年、各国で家政学の歴史や価値が確認され（例えば、Stage & Vincenti, 1997、Pendergast, 2001、Schweitzer, 2006）、国連が提唱するESDの10年（2005-2014）は確実に家政学の追い風となっている（Schweitzer, 2006）。こうした動向を受け、家政学に関心をもつ世界の若者が家政学の発展を自分たちが担うことを意識して2005年にYPN（Young Professional Network）を立ち上げ、国際的なネットワークと連携・情報交換・励ましあいによって自らを高める活動を始めたのは興味深い。特にヨーロッパではEC域内諸国の大学に学生を一定期間留学させるエラスムス計画なども手伝い、将来家政学領域における一層の国際的な連携が予想される。

これらの動向から、今や家政学者が世界規模で連携しながら社会へ貢献することが可能であること、そのためには、家政学の本質を共有しながら互いに学びあい、国際的に連携して共に働くことのできる新たな人材の育成が一層必要とされていることがわかった。また、特に世界の若手の家政学者が、ICTを活用したネットワークづくりや交流の強化を望んでいることもわかった。

今後は、世界の家政学領域において、これらの状況に対応した「人材育成」や「社会への発信」方法が求められると確信した。

(3) 平成18年度から20年度の3年間の間に、家政学とICTを活用した学校・大学レベル双方が関わる多様な形の国際交流プログラムを3事例試み、Web上のプラットフォームを作成した。さらに、大学において、家政学とICTを活用した国際交流プログラムがより効果的な教育プログラムとして機能するための授業開発を試みるとともに、国際交流プログラムを取り入れて、どのような人材をいかに育成するかについての考察を試みた。詳しくは、冊子として作成した研究報告書および、発表論文を参照されたい。

本研究の最大の成果は、家政学とICTを活用した国際交流プログラムやそれを支援するweb上のプラットフォームが、世界の家政学領域において求められる「人材育成」や「社会への発信」方法（場所や機会の提供）として、大きな可能性をもつことを示唆したことであろう。

今回、家政学とICTを活用した国際交流プログラムが、学校・大学それぞれのレベルの授業やカリキュラムを開発し、参加した生徒、大学生、教員、大学教員それぞれの学びを促す、効果的な教育プログラムとなることがわかった。このことは、家政学とICTを活用し

た国際交流プログラムが、学校・大学レベルでの家政学教育の発展を促すとともに、参加者が未来の家政学の発展を担う人材として育つ機会を提供する可能性をもつことを示唆したといえるだろう。と同時に、家政学領域外においても国際的で多様な教育プログラムとしてグローバルな社会を担う人材を育成し、それによって家政学の本質が社会へ伝わる機会を提供する可能性があることも示唆したといえる。また、こうした研究・実践を積み重ねることによって、それがいつしか国内外における家政学領域の発展につながる手ごたえも感じた。

本研究における国際交流プログラムの開発と実践は、国際交流に最適な科目としての家政学の大きな可能性を示したともいえるだろう。今後は、この事例がモデルとなり、より広い範囲の国において国際交流プログラムの開発と実践が行われることを期待したい。

本研究の試みが、家政学を活用した国際的で多様なレベルでの教育プログラムの発展と普及へつながり、それによって家政学の本質が誤解なく社会へ伝わるとともに、プログラムの参加者の中から未来の家政学を担う人材が育つことを願っている。

今後は、目的1、目的2に関する知見をまとめるとともに、目的3で行った実践を支える理論構築をすすめていきたい。また、当然のことであるが、本研究期間に明らかになった課題を解決しながら、国際交流プログラムのさらなる開発と実践を継続するとともに、プラットフォームの開発をすすめ、世界の家政学領域において求められる「人材育成」方法および「社会への発信」方法としての可能性と有効性をより確かなものにしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 山口厚子・白井靖敏、「質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その1)－国際交流プログラム企画・ホームページ作成(中間報告)－」総合科学研究、2007、第1号、91-93. 査読なし
- ② Yamaguchi, A., Ong, C., Hirayama, Y., Shirai, Y., Case observation of the Singapore - Japan international exchange program based on home economics at the secondary education level through Information and Communication Technology. Proceedings of the 14th Biennial International Conference of Asian

Regional Association for Home Economics, 2007, CDROM 版, 7. 査読なし

- ③ 山口厚子・白井靖敏、「質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その1)－国際交流プログラム企画・ホームページ作成－」総合科学研究、2008、第2号、1-7. 査読なし
- ④ 白井靖敏・山口厚子 「ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援(中間報告)～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その2)～」総合科学研究 2008、第2号、99-102. 査読なし
- ⑤ 白井靖敏、山口厚子「ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その2)～」総合科学研究、2009、第3号、45-54. 査読なし
- ⑥ 山口厚子・白井靖敏・木原貴子「家政学とICTを活用した国際交流プログラムを実践するためのサポート体制のあり方を求めて(中間報告)～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その3)～」総合科学研究、2009、第3号、63-74. 査読なし

[学会発表] (計2件)

- ① Atsuko Yamaguchi, Chiew Inn Ong, Yoshitaka Hirayama, and Yasutoshi Shirai, *The 14th Biennial International Conference of Asian Regional Association for Home Economics*, Case observation of the Singapore - Japan international exchange program based on home economics at the secondary education level through Information and Communication Technology (2007年8月8日、マレーシア、ホテル イースティン、ペタリンジャヤ)
- ② Atsuko Yamaguchi, Chiew Inn Ong, Emma Collins, Yoshitaka Hirayama, and Yasutoshi Shirai, *The XXI. World Congress of International Federation for Home Economics*, A Study to develop a platform to improve the

international collaborative learning
of Home Economics through Information
and Communication Technology (ICT)
(2008年7月29日、スイス、ルツェル
ン、University of applied science)

[その他]

国際交流プログラムを支援するWeb上のプラ
ットホームのアドレス

<http://gets.sakura.ne.jp/moodle/>

本研究の報告書は、冊子としてまとめられて
いる(全140ページ)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 厚子 (YAMAGUCHI ATSUKO)
名古屋女子大学・家政学部・講師
研究者番号：10351008

(2) 研究協力者

Ong Chiew Inn

Nanyang Girls' High School, Home
Economics Teacher, Singapore

倉元綾子 (KURAMOTO AYAKO)

鹿児島県立短期大学生生活科学科・準教授

研究者番号：20225254

白井靖敏 (SHIRAI YASUTOSHI)

名古屋女子大学・家政学部・教授

研究者番号：20267925

平山欣孝 (HIRATAMA YOSHITAKA)

三重県立久居高等学校・英語教諭

Emma Collins

Freelance Home Economics, UK

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

